

# 東日本大震災からの復活

畠山 重篤

(漁業者・NPO法人森は海の恋人代表)

東日本大震災から丸一〇年が経過しました。牡蠣養殖業という自然相手の商売を営む身として、自然災害との対峙は織り込み済みです。

しかし今回の東日本大震災による大津波は想像を絶する規模の津波でした。学者の方々の見解によれば、約千年前の「貞観」以来の大津波だということです。

何より悲しいことは、親しい友人、知人を失ったことです。個人的には最愛の母を失ってしまいました。

氣仙沼湾に注ぐ鹿折川河口に建っていた老人ホームにお世話になっていたのです。

津波のことも考慮し、土台を高くして建設さ

れていました。しかし、千年に一度の大津波には逆らうことはできませんでした。

津波の翌日、息子を同伴して訪れてみると、鹿折川は前日からの津波の余波で、潮が急流のように上下していました。

老人ホームは対岸にあります。橋を渡らねばなりません。橋の上には、船やら、車やら家の残骸など、ありとあらゆるものが積み重なっていました。その下をくぐり抜け必死で橋を渡りました。建物はすっかり建っていましたが、二階までの窓が破れています。母の部屋は二階です。消防署の人が管理していて入ることはできません。

事情を説明すると「特別ですが」と中に入れてくれました。「百五〇人ほど入所してたので

## 畠山 重篤（はたけやま・しげあつ）



一九四三年、中国生まれ。牡蠣養殖業、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。家業のかたわら氣仙沼湾に注ぐ大

川上流の室根山へ植林運動を始める。また子供たちを養殖場へ招き、環境教育のための体験学習を行っている。「森は海の恋人」運動は中学校の国語、高校英語教科書に取り上げられている。その運動において、朝日森林文化賞、「みどりの日」自然環境功労者環境庁長官表彰、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰、国連フォレストヒーローズ賞を受ける。『日本へ汽水＜紀行＞』で第五二回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。著書多数。

す。七〇人は亡くなったようです」。

母の名前を伝えますと、「この中にいらっしやいます」と告げられたのです。

ベッドの上に白布をかけられ遺体が並べられていました。

戦争のない、平和な時代に生きてきた身にとつてこのような光景に遭遇したことはもちろんありません。この遺体の中から母を探し当てなければなりません。白布を一枚一枚めくりはじめました。

平安なお顔だけではありません。お一人お一人、手を合わせ進むしかありません。

半分ほど進んだ時息子が、「これおばあちゃんのお靴だ」と言ったのです。おばあちゃん子だった二男は大人になっても覚えていたのです。

おそる、おそる、白布をめくってみました。柔和な母の顔があり、ホッとしました。「寒い思いをさせ申し訳ありません」と何回も何回も謝りました。

ペットボトルの水を手ぬぐいに浸し、顔の泥をぬぐってやりました。

市役所から「火葬は二週間後になります」と告げられました。

安置されている中学校の体育館に行つてみると、遺体で埋め尽くされています。どこの体育館もそうだということです。千人を超す人が亡くなるとは、こういうことなのです。

それから毎日、お花を持って家内と会いに行きました。遺体はきちんと管理されていて日本の国力を感じました。

形ばかりの葬儀を行いました。仮設住宅から駆けつけた婦人たちが口々に「普段着で申し訳ありません」というのです。殆んどの人が津波で喪服を流されてしまったのです。母と親しかった婦人たちの心情を察しますと、悲しみが深くなるばかりでした。

牡蠣養殖業という仕事の弱点は津波に弱いことです。海に浮かべてある養殖筏は見る影もありません。船も、作業場も無残な姿に変わりはてていました。

でも、最大の恐怖は海の水質です。牡蠣の餌となる植物プランクトンがちゃんと生きているかどうか心配でした。

ありとあらゆるものが海に流れ込み混濁の極みです。特に日本有数の漁港である気仙沼湾には、大きな油タンクが並んでいました。

それらが混じり合つた水質は、生命の存在を許さないのです。海から生き物の姿が全く消えてしまったのです。

ある学者の方は、これは毒の水だと表現されました。毒では生き物は生存できません。

しばらく絶望感に苛まれた日々が続きました。五月になつて、京都大学の魚類学者、田中克先生から連絡がありました。千年に一度といわれる大津波の後の自然環境がどう変遷するかを調査するチームを組んだので行きますから、というのです。

田中先生は森から海までの環境をトータル的に俯瞰する学問、「森里海連環学」を提唱した方です。

二〇年前になりますが、牡蠣漁師の私を「京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授」に推薦して下さいました。漁師による広葉樹の森づくり「森は海の恋人運動」の本質を見抜かれていました。

プランクトンネットを曳き、顕微鏡を覗かれ  
こう話されたのです。「畠山さん安心して下さい。  
カキが食いきれないほどプランクトンがい  
ます。これは森は海の恋人運動の勝利です」と。  
平成六年から続けてきた漁師による森づくりの  
効果は、千年に一度の津波を経て証明されたの  
です。